

南台人文社會學報

第二期 2009年11月 頁1-27

蓋然性のモダリティの性質と類義関係について — 「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「カモシレナイ」を中心に—

蔣 千苓

要旨

今までの先行研究は、認識のモダリティにおいて、「ヨウダ」「ラシイ」などの証拠性のモダリティに関して、多く論じられてきたが、「ニチガイナイ」「カモシレナイ」などの蓋然性のモダリティに関する論考はまだ多くないように思われる。そこで、本論では蓋然性のモダリティ「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「カモシレナイ」という三つの形式を考察し、三つのモダリティ形式の性質と類義関係を明らかにすることとした。

キーワード：蓋然性のモダリティ、に違いない、はずだ、かもしれない

蔣 千苓 義守大学応用日本語学科助理教授

電子メール：cchienling@pchome.com.tw

南台人文社會學報

第二期 2009 年 11 月 頁 1-27

推測判斷語氣的性質及類義關係

—以「nichigainai」、「hazuda」、「kamosirenai」為對象—

蔣千苓

摘要

至今為止，關於日文的推測判斷語氣之研究多半仍停留在「youda」「rashii」二者。而對於「nichigainai」、「kamosirenai」等蓋然語氣的研究並不多見。因此，本研究針對「nichigainai」、「hazuda」、「kamosirenai」三者進行分析比對，並試著釐清三者間的性質及其類義關係。

關鍵詞：推測判斷語氣、「nichigainai」、「hazuda」、「kamosirenai」

蓋然性のモダリティの性質と類義関係について —「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「カモシレナイ」を中心に—

蔣 千苓 義守大学応用日本語学科

1. はじめに

今までの先行研究は、認識のモダリティにおいて、「ヨウダ」「ラシイ」に関して、多く論じられてきたが、「ニチガイナイ」「カモシレナイ」などに関する論考はあまり多くないように思われる。

本稿では、まず認識のモダリティの諸形式について、先行研究で指摘されていることを概観する。ついで、蓋然性のモダリティ「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「カモシレナイ」という三つの形式の用法や性質を検討する。最後にそれらの類義関係について詳しく考察していく。

2. 認識のモダリティの分類について

認識のモダリティは、命題の真偽に対する話し手の認識的な捉え方を表すものである。認識のモダリティを表す形式には「ダロウ」「ヨウダ」「ラシイ」「ニチガイナイ」「ハズダ」「カモシレナイ」などがある。

断定形式（ ϕ ）を除き、認識のモダリティは、事実として確定していないことについて、その真偽に対しどのように判断しているか、情報をどのように入手したか、を以下のような文末形式で表し分けている。

- (1) 北海道ではもう雪が降っているだろう。(推量) (作例)
- (2) 犯人は太郎に違いない。(必然性) (作例)

(3) その人はこの大学の学生ではないそうだ。(伝聞)(作例)

認識のモダリティの先行研究としては、日本語記述文法研究会(2003)、宮崎(2002)、仁田(2000、1991)、三宅(1995、1993)などが挙げられる。しかし、分類の仕方は研究者によって異なるので、比較検討する際に問題が生じると考えられる。そこで、先行研究で指摘されている認識のモダリティの意味的類型を表1のように整理しておく。

表1 認識のモダリティの意味的類型

	分類	日文 2003	宮崎 2002	仁田 2000	三宅 1993	形式
類 型	I	推量	推量	推量	推量	だろう
	II	蓋然性	可能性	蓋然性判 断	可能性判 断	かもしれない
	III		必然性			確信的判 断
	IV	証拠性	証拠性	徴候性判 断	実証的判 断	(し) そうだ ようだ、らしい

※日文＝日本語記述文法研究会

表1が示すように、大半の先行研究が、認識のモダリティを推量(話し手の想像)、蓋然性(判断の確かさ)、証拠性(証拠に基づく判断)の三つに大別している。また、蓋然性はさらに可能性と必然性に分けられている。

先行研究の分析によると、推量の「ダロウ」は話し手の想像による

判断であるという点で、他の二類と大きく異なっている。以下のように、過去の時点における判断を表せないことと、疑問詞や疑問の助詞「か」と共起することが「ダロウ」の特徴である。

- (4) *太郎は学校に来るだろうた。(作例)
- (5) 太郎は学校に来る {かもしれないなかった／にちがいなかった／ようだった}。(作例)
- (6) 来週の天気はどうだろう (か)。(作例)
- (7) *来週の天気はどう {かもしれない (か) ／にちがいない (か) ／らしい (か)}。(作例)

宮崎 (2002) によると、蓋然性 (判断の確かさ) と証拠性 (証拠に基づく判断) の対立は基本的に内的思考による認識であるか、外的状況の観察による認識であるか、ということにある。

一般に蓋然性に関する形式は「と思う」と共起でき、話し手の思考内容を表すことができる。一方、証拠に基づく判断は話し手の思考の中で直接、認識するのではなく、外的状況から証拠の存在を認識するものであるため、証拠性表現は「と思う」と共起できない (但し、同じ証拠性表現である「(シ) ソウダ」は、多くの場合、「ヨウダ」「ラシイ」とは異なる分布をする)。

- (8) 花子は来る {かもしれない／はずだ／にちがいない} と思う。
(作例)
- (9) 花子は {*来るようだ／*来るみたいだ／*来るらしい／?来そうだ} と思う。(作例)

また、「カモシレナイ」「ニチガイナイ」「ハズダ」は内的思考による

認識であるため、仮定条件文の後件に出現でき、帰結を表すことができるが、外的の観察に基づく「ヨウダ」、「ラシイ」などは特殊な場合以外、一般に仮定条件の帰結には用いられない（日本語記述文法研究会 2003）。

- (10) もし佐藤がこのことを知ったら、びっくりする {かもしれない／にちがいない／はずだ}。

（日本語記述文法研究会 2003 : 140）

- (11) もし佐藤がこのことを知ったら、びっくり {*するようだ/*するみたいだ/*するらしい/しそうだ/*するそうだ}。

（日本語記述文法研究会 2003 : 141）

先行研究の指摘によって、蓋然性の特徴を次の表 2 のようにまとめることができる。

表 2 蓋然性のモダリティの特徴

類型	蓋然性	
形式	可能性	カモシレナイ
	必然性	ニチガイナイ ハズダ
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・「と思う」と共起できる ・仮定条件文の帰結を表すことができる 	

以上の考察によって、本論の研究対象とされる「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「カモシレナイ」は話し手の思考内容と仮定条件文の帰結を表すことができるということが分かった。次に、この三つの形式が表さ

れる意味用法について焦点を当てて考察を進めていく。

3. 蓋然性のモダリティの意味機能

3.1 「ニチガイナイ」

先行研究には、「ニチガイナイ」を「命題が真であると確信する（三宅 1993 : 36）」ことや「事態の生起・実現の確率がきわめて高いことを示したもの（仁田 2000 : 133）」、あるいは、「命題内容に対する話し手の強い確信（羅 1995 : 87）」を表すという分析がある。「ニチガイナイ」については、先行研究は「話し手の強い確信を表す」というおよそ一致した見解に達している。しかし、推論の根拠や前提について、他の形式とどう違うのかを明確にする必要があると考え、以下では先行研究の考察を通して、推論過程における「ニチガイナイ」の特徴を見ていく。

日本語記述文法研究会（2003 : 158）は「ニチガイナイは、断定はできないが、その判断が間違いのないものとして確信されるという意味を表す」と指摘している。(12)のように、命題が真であるかどうか分からないが、話し手は何らかの根拠で、命題が真であるという確信的判断を下すのである。そのため、「ニチガイナイ」は話し手の確信（思い込み）にとどまるものであり、ある種の責任を持って聞き手に情報を伝えるような文脈においては、不適切と見なされる（三宅 1995 : 193）。例えば、(13)のような場面で「ニチガイナイ」を用いると、不適切になる。

(12) あんなすばらしい車に乗っているのだから、田村さんは金持ちにちがいない。 (砂川他 1998 : 220)

(13) A : 課長は今日来られますか。

B : *はい、来るに違いありません。 (田村 2000 : 218)

次に、判断の根拠について考えてみよう。三宅（1995：196）は「ハズダはかなり確かな根拠をもとにしての確信であることが含意されるが、ニチガイナイにはそのような含意はない」と指摘している。従って、「ニチガイナイ」の確信は話し手の主観による場合が少なくないと言えよう。また（14）のように、「ニチガイナイ」の推論の根拠は話し手の内在的知識に基づく場合がある。

- （14）あの人は規則をわざと破るような人ではない。きっと知らなかったにちがいない。 （砂川他 1998：220）

ところが、羅（1995）によると、「ニチガイナイ」は絶対的根拠が表面化されているような文脈には使えない。「ニチガイナイ」は発話時点で断定できない事柄の実現に対し、話し手の強い確信の態度を表すものであるため、発話時点で事柄の実現が確認できるような文脈では用いることができない。

- （15）*500 円のものを四つ買うなら 2000 円が要るにちがいない。 （作例）

以上の考察によって、「ニチガイナイ」の特徴について、次のようにまとめることができる。

- a 断定はできないが、命題が真であるという確信的判断を表す。
- b 根拠は客観的なものに限らず、話し手の主観による判断も少なくない。
- c ある種の責任を持って聞き手に情報を伝えるような文脈では用いられない。

d 絶対的根拠がある文では使えない。

3.2 「ハズダ」

先行研究には、「ハズダ」を「論理的推論（日本語記述文法研究会 2003:161）」や「そう判断する論理的根拠があること（三宅 1995:174）」、あるいは「論理や既存知識に基づいて考えた結果得られた確信（庵他 2002:210）」を表すという分析がある。

(16) のように、「ハズダ」の推論は確かな根拠に基づいた合理的判断、あるいは当然の帰結を表す。そして (17) のように、判断の根拠が論理的に筋道の追えるものではない場合、用いることができない。

(16) あれから4年たったのだから、今年はその子も卒業のはずだ。

(砂川他 1998:500)

(17) *めがねが見つからない。またどこかに置き忘れたはずだ。

(同上)

このことから、「ハズダ」の意味は「確かな根拠に基づく話し手の論理的推論」とまとめることができよう。これに対して、宮崎（2002）は「ハズダ」の中心的意味には「当然視」という概念があるとしている点で注目される。

「その本質的な意味は、その事柄の成立を話し手が確信しているということではなく、当然視しているということであると考える必要がある」(p. 151)

例えば、(18) は記憶を再確認することによって、その事柄を当然視していることを表す。そのため、(19) のように、「ハズダ」が過去形

をとったり、逆接表現を伴ったりした場合、「本来はこうであるが、現実にはそうでない」という反事実的な意味を表すことがある。

(18) 佐藤はタバコは吸わないから、禁煙席にいるはずだ。

(日本語記述文法研究会 2003 : 161)

(19) a. 昨日は一日休みのはずだった。〔過去形〕(作例)

b. ここをクリックすれば、絵が大きくなるはずなのだが。

〔逆接表現〕(作例)

また、(20) のように、すでに事実となっている事柄について、当然のこととして捉え、納得の意味を表すこともある。

(20) つかないはずだ。電池が切れている。

(坂田・倉持 1993 : 130)

なお、「ハズダ」は「ニチガイナイ」と異なって、(21) のように、絶対的な根拠がある場合にも用いられる。これは、「ハズダ」の本質は話し手の確信というより、当然視であることを意味し、上記の宮崎(2002) の見解を裏付けていると思われる。

(21) 500 円のものを四つ買うなら 2000 円が要るはずだ。(作例)

以上の考察によって、「ハズダ」の特徴について、次のようにまとめることができる。

a 確かな根拠に基づいて合理的判断を表す。

b 論理的に筋道の追えるものではない場合、用いることができない。

c 常識などを根拠に事柄の成立の当然性を表す。

d 絶対的根拠がある場合にも用いられる。

3.3 「カモシレナイ」

先行研究では、「カモシレナイ」を「命題が真である可能性がある」と認識する（三宅 1992 : 38）」ことや「可能性があること（宮崎 2002 : 145）」、または「その推量が当たっているかどうかには自信がないということ（野田 1984 : 114）」を表すと分析されている。要約すれば、「可能性があることと認識している表現」であると言えよう。

「カモシレナイ」は「ニチガイナイ」、「ハズダ」と異なって、話し手は自分の推測に対し、あまり自信がないというニュアンスを持っている。但し、確信が弱いということは、命題が真である可能性が低いというわけではない（宮崎 2002 : 145）。例えば、(22) のように、実現の可能性が高いことを表す副詞「きっと」と共起することがある。

(22) 相手もきっと自分に気を配っているのかもしれないわ。(作例)

また、(23) のように、万が一の場合を想定して用いられる場合もあれば、(24) のように雨が降る可能性が高いと捉え、用いられる場合もある。つまり、量的な程度がどうであれ、「カモシレナイ」は、話し手がある事柄の実現する可能性を表すと同時に、そうではない可能性の存在をも表すのである。従って、「カモシレナイ」は可能性の存在のみを問題にし、未知の事柄の真偽を判定する形式ではないと言えよう（日本語記述文法研究会 2003 : 154）。そのため、(25) のように、話し手の行動予定について「カモシレナイ」を用いることが可能である。

(23) 飛行機が落ちることもあるかもしれないから、傷害保険をかけておこう。
(坂田・倉持 1993 : 185)

(24) 雨が降るかもしれないから、かさを持って行こう。

(同上)

(25) 明日、学校へ行くかもしれない。

(作例)

さらに、宮崎（2002：145）によると、「カモシレナイ」はある事柄が成立する可能性と成立しない可能性と共存する認識を表すため、相互に矛盾する事柄を並列させることができる。そのため、(27) のように、「カモシレナイ」は「判断できない」や「分からない」と共起することができる。

(26) 太郎は学校へ行ったかもしれないし、あるいは、まだ家にいるかもしれない。(作例)

(27) 私にはよく分かりませんが、太郎はひよっとしたら家出をしたかもしれない。(作例)

以上の考察によって、「カモシレナイ」の特徴について、次のようにまとめることができる。

- a 話し手は自分の推測に自信がないものの、命題成立の可能性の高低とは関係ない。
- b 矛盾する事柄を並列させることができる。
- c 真偽の判定を放棄するため、話し手の行動予定について用いることが可能である。
- d 「判断できない」や「分からない」と共起できる。

それぞれの分類と意味機能をまとめてみると、表3の通りである。

表 3 蓋然性のモダリティ

分類	モダリティ形式	効力	意味機能
推論	ニチガイナイ	強い確信の認識	必然性に基づく確信
推論	ハズダ	当然性の認識	必然性に基づく確信
推測	カモシレナイ	可能性の認識	可能性に基づく推測

4. 蓋然性モダリティの性質

次に、三つの形式が、形式自体の、あるいは先行する述部のテンスの分化、疑問文化、否定文化等の点においてどのように振舞うか、を考察する。

4.1 タ形の意味について

蓋然性を表す三つの形式は次の (28) (29) (30) のように、いずれも形式自体にテンスの分化を持ち、発話時以外に言及することができる。

(28) 心が落ち着く場所を捜したのかもしれなかった。(作例)

(29) 彼はほとんど一晩中ねむっていないにちがいなかった。(作例)

(30) 太郎は、本来は政治家じゃなくてカレー屋になるはずだった。

(作例)

但し、「カモシレナイ」と「ニチガイナイ」の場合、小説などで過去のことを描写する時に見られるが、話し言葉ではやや不自然であるように思われる。

また、前に述べたとおり、(30) のように、「ハズダ」は過去形をとった場合、「本来はこうであるが、現実はそうでない」という反事実的

な意味を表すことがある。

4.2 先行命題のテンスの分化

次に、先行命題のテンスの分化・未分化について見てみる。尹(1999: 222)では、認識のモダリティは全てテンスの分化を許すと指摘している。評価のモダリティと異なり、理想的なあり方を述べるものではなく、命題の真偽に対する話し手の判断を表すものなので、〈ル形〉と〈タ形〉の対立が存在するのである(以下は作例である)。

(31) 花子が学校へ {行く／行った} にちがいない。(作例)

(32) 花子が学校へ {行く／行った} はずだ。(作例)

(33) 花子が学校へ {行く／行った} かもしれない。(作例)

(34) このりんごは {高い／高かった} にちがいない。(作例)

(35) このりんごは {高い／高かった} はずだ。(作例)

(36) このりんごは {高い／高かった} かもしれない。(作例)

(37) あの先生は {頑固／頑固だった} にちがいない。(作例)

(38) あの先生は {頑固／頑固だった} はずだ。(作例)

(39) あの先生は {頑固／頑固だった} かもしれない。(作例)

(40) 花子は {芸能人／芸能人だった} にちがいない。(作例)

(41) 花子は {芸能人／芸能人だった} はずだ。(作例)

(42) 花子は {芸能人／芸能人だった} かもしれない。(作例)

各形式の接続の仕方をまとめると、次のようになる。

表 4 三つの形式の接続の仕方

	ニチガイナイ	ハズダ	カモシレナイ
動詞	非過去形 過去形	非過去形 過去形	非過去形 過去形
名詞	N N だった	N の N だった	N N だった
イ形容詞	非過去形 過去形	非過去形 過去形	非過去形 過去形
ナ形容詞	語幹 過去形	Na な Na だった	語幹 過去形

4.3 先行述語の否定と形式の否定について

続いて、各形式の否定表現を見てみる。認識のモダリティの否定表現は〈先行述語の否定〉と〈形式の否定〉に分けられる。前者は否定述語に接続することを、後者はモダリティ形式自体が否定形であることを意味する。認識モダリティの場合、話し手が主観的判断を述べる際に、その判断を否定することは矛盾するので、命題否定となる。

(43) 「彼は本気ではないかもしれない／に違いない／はずだ」(作例)

[彼は本気ではない]+かもしれない／に違いない／はずだ
 (作例)

⇒ [[命題]否定]法

表 5 のように、三つの形式の中で、否定形をとることができるのは「ハズダ」のみである。ところで、「ハズダ」の否定表現の〈はずがない〉と〈はずではない〉については、日本語記述文法研究会 (2003 :

162) は、「〈ハズダ〉が否定形をとった場合、当然性が否定されるわけではない。…〈はずがない〉は可能性を否定する表現であり〈わけがない〉とほぼ同義である。」と指摘している。また、國廣（1982）は、「ハズデハナイ」の場合は「そのような見込みではなかった」という意味を表すときに限られると述べている。

- (44) 今日は残業するはずではなかったのだが、急に仕事が入ってしまった。
（日本語記述文法研究会 2003 : 161）

一方、「ニチガイナイ」は「ニ+違イ+ナイ」という構成要素の複合体で、「カモシレナイ」は「カ+モ+シレ+ナイ」という構成要素の複合体である。両者とも形式自体に「ナイ」が含まんでいて、否定辞「ない」が後続できない。

- (45) *彼は学校へ行くかもしれなくない。(作例)

- (46) *彼は学校へ行くにちがいなくない。(作例)

以上をまとめてみると、次の表5のようになる。

表5 三つの形式の否定表現

	ニチガイナイ	ハズダ	カモシレナイ
モダリティ形式の肯定	ニチガイナイ	ハズダ	カモシレナイ
行為の否定	ナイニチガイナイ	ナイハズダ	ナイカモシレナイ
モダリティ形式の否定		ハズガナイ ハズデハナイ	

4.4 疑問文と連体修飾節の使用状況

評価のモダリティと対照的に、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ハズダ」はいずれも疑問文には用いられない。羅 (1995 : 24) は「認識性モダリティは常に話し手の思考作用に対する肯定的な表現態度を表すので、基本的にその思考作用自体が疑問化されたり、否定化されることはできない」と指摘している。また、田村 (2000 : 115) は「疑問文化されないのは、両形式 (ニチガイナイ、カモシレナイ) に話し手固有の情報を示すという特徴があることを示唆している」と述べている。つまり、話し手は自分自身が下す判断に対し、疑問文化や否定化するのとは不自然になるということである (上述のように、「ハズダ」は否定形式「ハズガナイ」を持つが、これは判断の否定ではなく、可能性の否定を表すものである)。

- (47) 太郎は京都へ行く {かもしれない/*かもしれないか/*かもしれないくない}。(作例)
- (48) 花子はケーキを食べた {にちがいない/*にちがいないか/*にちがいなくない}。(作例)
- (49) 彼は合格する {はずだ/*はずか/はずがない}。(作例)

次に、各形式の連体修飾節における使用状況を見てみよう。次の例のように、蓋然性のモダリティはいずれも連体修飾節に出現することができる。

- (50) まだわかっていない大切な成分があるにちがいないことが、経験上知られているからです。(作例)
- (51) ごく当たり前のはずのことをすごく幸せに思うことができる

ようになりました。(作例)

- (52) ここでは役立つかもしれないことを書きたいと思いま
す。(作例)

三つの形式は疑問と否定の対象(「ハズダ」を除く)とならないという点で、モダリティ形式としての特徴を示す。しかしながら、連体修飾節に出現することができ、命題を構成することがあり、命題要素としての特徴も示していることになる。

4.5 まとめ

以上の考察結果に基づき、ここでまとめておく。

表6 認識のモダリティの性質と特徴

	判断の 根拠	タ形	先行命題 のテンス	否定形式	疑問 文	連体 修飾
ニチガイナイ	必然性	反事実、事実	分化	先行述語	×	○
ハズダ	必然性	反事実のみ	分化	形式と述語	×	○
カモシレナイ	可能性	反事実、事実	分化	先行述語	×	○

認識のモダリティは命題の真偽に対する判断で、話し手固有の情報を示すため、命題のテンスの分化を許し、疑問文になってはいけないのである。

黒滝(2005: 196)は認識のモダリティについて、「話し手の想像の中での認識を表すものである。〈ニチガイナイ〉等は、命題が真である

ことを非現実的なものとして捉えていて、その結果不確実であることが含意される。あくまでも話し手自身の信念に触れているので、情報価値として低い。したがって、独断的に話し手自らが認める個人的な想像による情報内容ということになる」と指摘している。つまり、認識のモダリティは話し手が命題の真偽を知らないという前提に立って話しをする世界であると言えよう。

以上、先行研究の考察を踏まえつつ、蓋然性を表す三つの形式の基本的意味と性質を大まかに見てきた。

5. 類義関係をめぐって

蓋然性を表す三つの形式の意味機能は類義性と置換性という観点から再検討すると、どのように捉えることができるだろうか。以下では「ニチガイナイ」「ハズダ」「カモシレナイ」の類義関係について述べる。

5.1 「ニチガイナイ」と「ハズダ」の類義関係

(53) (54) のように、「ニチガイナイ」、「ハズダ」はどちらも「確信的判断」が表され、話し手の推論の結果として、事態の成立が確信されることを表す形式である。そして、前にも述べたように、両方とも「根拠に基づいて推論すれば、必然的にこうなる」という必然性に基づく判断であるため、(55) (56) のような相矛盾する事柄を並列させることができない。

(53) 太郎はもうアメリカへ行ったはずだ。(作例)

(54) 太郎はもうアメリカへ行ったにちがいない。(作例)

(55) *山田は学校へ行くはずだし、行かないはずだ。(作例)

(56) *山田は学校へ行くにちがいないし、行かないにちがいない。

(作例)

このように両者の意味はよく似ているものの、判断の根拠、命題内容の真偽、反論余地の有無などにおいては相違が見られる。

まず、判断の根拠に関しては、前にも述べたとおり、「ハズダ」はかなり確かな根拠をもとにし、〈当然～ということになる〉というニュアンスが含意されるのに対し、「ニチガイナイ」は確かな根拠があるかどうかを問わず、〈主観的には間違いなく～である〉というニュアンスが含意される。従って、(57) のように、直感的な確信を表す場合、「ニチガイナイ」のみが自然に感じられる。

(57) 彼は一目見て親切な人 {にちがいない／×のはずだ} と思った。
(庵他 2002 : 210)

また、(58) のように、絶対的根拠のもとでは「ハズダ」しか用いられない。宮崎 (2002 : 150) は「ニチガイナイの用法は、真偽不明な状況での推論に限定されているのだが、ハズダは、命題内容の真偽値がすでに確定している場合でも、使用されることがある」と述べている。これは、話し手の確信を表す点に主眼を置く「ニチガイナイ」と異なると、
「ハズダ」が帰結の当然性を表すことを裏付けていると思われる。

(58) 500 円のをものを四つ買うなら、2000 円が要る {はずだ／*にちがいない}。(作例)

さらに、両者の確信の強弱について見てみよう。ピヤマーワディー (1991 : 90) は下の〈しかし、…かもしれない〉テストを用い、両者の強弱を検討し、次のように述べている。

「ハズダ」は「ニチガイナイ」より確信の弱い推論であって、その推論の結果から得た結論の可能性も実際には推論の通りにならないことも十分考えられるため、推論から導いた可能性を一旦引き下げて他の可能性もあるということを示す表現が後続することができるかと予測される。

(59) 松田さんは図書館にいるはずだ。しかし、ひょっとしたら、いないかもしれない。

(ピヤマーワディー1991: 90)

(60) *松田さんは図書館にいるにちがいない。しかし、ひょっとしたら、いないかもしれない。 (同上)

しかし、「ハズダ」は本当に確信の弱い推論なのだろうか。次の(61)(62)を見てみよう。実際に「ハズダ」は「ニチガイナイ」と同じく、確信度の100%ほどの強い副詞「絶対(に)」と共起できる。つまり、命題の真理値に対して「ハズダ」は決して弱い推論とは言えない。

(61) 彼なら絶対受かるはずだ。(作例)

(62) 本物の旅行者の話は、絶対におもしろいはずだ。(作例)

では、「ハズダ」に「しかし…かもしれない」のような表現が後続できる原因は何なのだろうか。それは、やはり両者の着目点が異なることにあると思われる。「ハズダ」は当然の帰結に重点を置くのに対し、「ニチガイナイ」は話し手の確信感を表す点に重点がある。「ハズダ」を用いた文では、自分の確信感を強調していないため、「しかし…かもしれない」とより共起しやすくなると考えられる。

また、「ニチガイナイ」は「自分の思案、推量を自分に確かめるよう

な、独白的な使い方がふつうである」(寺村 1984 : 235-236) という性格も若干影響を与えていると考えられる。独白表現の「ニチガイナイ」を用いると、真であるかどうかを問わず、話し手の推論(確信)を覆す余地を与えないということである。その一方、「ハズダ」の場合は、話し手は疑わない気持ちで推論するが、反論の余地を与え、それを否定されてもかまわない表現だと言えよう。

以上の考察によって、「ニチガイナイ」と「ハズダ」の相違は次のようにまとめられる。

表7 「ニチガイナイ」「ハズダ」の比較

	絶対的根拠	矛盾並立	必然性	確信の度合い
ニチガイナイ	－	－	＋	＋
ハズダ	＋	－	＋	＋

5.2 「ニチガイナイ」「ハズダ」対「カモシレナイ」の類義関係

「ニチガイナイ」、「ハズダ」、「カモシレナイ」はいずれも蓋然性を表す範疇に属しているが、「カモシレナイ」は、必然性に基づく認識の「ニチガイナイ」「ハズダ」と異なって、その事柄が成立する可能性があるという認識を表す形式である。そのため、(63)のように、相手の考え方に譲歩する文脈においては、「カモシレナイ」しか用いられない(日本語記述文法研究会 2003 : 154)。

(63) 確かにおっしゃるとおり {かもしれません/*に違いありません/*のはずです} が、こちらはこちらで立場があるので
す。(日本語記述文法研究会 2003 : 154)

副詞との共起に関しては、日本語記述文法研究会(2003)、仁田(2000)

によると、「ニチガイナイ」と「ハズダ」は「きっと」のような確信度の高い副詞とは相性がよく、共起しやすいのに対し、「ひょっとして」「もしかしたら」などのような確信度の低いものとは相性が悪く、共起しない。それに対し、「カモシレナイ」は確信度の低い「ひょっとして」「もしかしたら」と相性がよく、共起しやすい特性を持っている。

- (64) あの絵は素晴らしい。値段もきっと高い {にちがいな
い／はずだ}。(作例)
- (65) ??あの絵は素晴らしい。値段もきっと高いかもしれない。(作
例)
- (66) ??あの絵は素晴らしい。値段もひょっとして高い {に
ちがいな／はずだ}。(作例)
- (67) あの絵は素晴らしい。値段もひょっとして高いかもし
れない。(作例)

但し、「カモシレナイ」を用いる場合、話し手が自分の推測に自信がないということを示すだけで、命題成立の可能性の高低とは関係がない。「カモシレナイ」は(68)(69)のように、蓋然性の高い「確かに」「もちろん」と共起することがある。ここで注意すべきことは、このような場合、「確かに」や「もちろん」は命題だけを修飾しているということである。

- (68) 確かにそうかもしれません。(作例)
- (69) 欠点はもちろんあるかもしれませんが、欠点ばかりを見て
はいけません。(作例)

また、前に述べたように、「カモシレナイ」は、未知の事柄の真偽を

判定する形式ではないので、話し手の行動予定について用いることが可能であるのに対し、「ニチガイナイ」と「ハズダ」は用いることができない。

(70) 明日、学校へ行く {かもしれない/*にちがいない/*はずだ}。(作例)

最後に、絶対的根拠のもとでは、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」は用いられない。なぜなら、両方とも真偽不明な状況での推論・推測に限定されているからである。両者は根拠の特徴について明示しないという点で共通している。

(71) *500 円のを四つ買うなら、2000 円が要る {かもしれない/*にちがいない}。(作例)

以上の考察は次のようにまとめられる。

表8 「ニチガイナイ」「ハズダ」「カモシレナイ」の比較

	絶対的根拠	矛盾並立	必然性	確信の度合い
ニチガイナイ	－	－	＋	＋
ハズダ	＋	－	＋	＋
カモシレナイ	－	＋	－	－

6. まとめと今後の課題

以上、「ニチガイナイ」「ハズダ」「カモシレナイ」について先行研究や用例を基に、それぞれの意味用法、そして三つの形式の類義関係に

着目して分析を行った。今後、本稿での考察をもとに、他のモダリティ形式と比較し、研究を進めていきたい。

参考文献

- 庵 功雄他 (2002)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 國廣哲彌 (1982)「ニチガイナイ・ハズダ」『ことばの意味 3』pp. 95-103
平凡社
- 黒滝真理子 (2005)『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性
——モダリティの日英対照研究——』くろしお出版
- 坂田雪子・倉持保男 (1993)『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ
改訂版』凡人社
- 蔣 千苓 (2007)『日本語のモダリティ表現と人称について ——中国語
との比較を中心に——』東北大学国際文化研究科博士学位論文
- 砂川有里子他 (1998)『日本語文型辞典』グループ・ジャマシイ編 く
ろしお出版
- 田村直子 (2000)『複合文末形式の意味と用法』筑波大学博士学位論文
- 仁田義雄 (2000)「認識のモダリティとその周辺」『モダリティ』
岩波書店
- (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編 (2003)『現代日本語文法 4』くろしお出版
- 野田尚史 (1984)「～にちがいない／～かもしれない／～はずだ」『日
本語学』3-10 明治書院 pp. 111-119
- 三宅知宏 (1993)「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語
文』61 大阪大学国語国文学会 pp. 36-46
- (1995)「ニチガイナイとハズダとダロウ」『日本語類義表現の
文法 (上)』くろしお出版 pp. 190-200
- 宮崎和人 (2002)「第 4 章 認識のモダリティ」『モダリティ』くろし
お出版

羅聖榮 (1995) 『日本語と韓国語のモダリティの対照研究』筑波大学博士学位論文

ラッチャニー・ピヤマーワディー (1991) 『日本語とタイ語のモダリティの対照研究』筑波大学博士学位論文

付記

本稿は筆者の博士論文の一部(未発表)を加筆・修正したものである。